

會報



号七第年二第

昭和六年八月二十四日発行 通巻第十二号

山登りに欲しきものは、よき山、よき友、よき天気である。此の三つが、うまく組合はる事は中々に難しい。

よき山は、嘗つて訪れた山ならば選擇も出来るが、未知の山となると、果して心に適ふかどうか、難しい。

よき友は、友を得る事も難しからう。併し折角友を得ても、共に山にゆくとすると又難しい。互に山へゆける日が、何のかのと用に妨げられて都合のつかない事が多い。

よき天気となれば、友は益々以て難しい。山が定まつて、都合がついて、さてとなると空が曇つておあつと来る。始末にいけない。

よき山、よき友、よき天気。何時でも山へゆかふと思へば、この三つがびたりと揃ふ様なら、一生の中にどんなに多の山に登れるか知れない。多くの場合は、よき山はあれども、あとの二椅子が

揃はない事が多い。併しもつと多くの場合は、よき山、よき友は揃ふのだが、あとの一椅子が調子を狂はす事が多い様だ。こうなると山へ登るのも、又難しい哉と歎ぜざるを得ない。此の頃の様な天気を眺めてみると、余計そんな事が思はれる。

(浦松)

味

こゝでいふ味は味覺のことである。一口に味とはいふもの、よく内容を考へてみるとなか／＼容易ならぬ代物で大体次の様な要素を備へてゐるらしい。

- 一、食物それ自体の味（所謂持味といふもの）
 - 二、調味料の配合
 - 三、其食物を摂取する人の身体の調子
 - 四、摂取時期
 - 五、摂取時の周囲の状況
 - 六、光（或は色）
 - 七、温度
 - 八、香
 - 九、入数
 - 十、咀嚼
- 一が本質的なものであり二以下が従属的なものであることは云ふまでもない。調味料の配合は食べ

る人の好により、食べさせる人（料理人等）により千差万別ではあるが、大体に或限度とか割合とかいふものがあつて、それを外れると所謂不味くなる。朝食が大抵の人にとってあまりうまくないのは起きて早々であるためあまり食欲がないためである。同じ食物でも健康時と病気の時とはひどく違ふ。身体の調子である。摂取の時期が又問題である。猛烈な空腹を持つて食べば天下に凡そ不味なものはない。穢らしい所での食事は不愉快で且不味である。汽車旅行で食事の最中にトンネルに入ったたり、夕食時の停電等は感興を殺ぎ、味を減殺すること夥しい。所謂暗黒で食ふ不味である食物の多くは熱いうちに食べないと味がなく、冷い吹物、冷めたい塩焼など沙汰の限りである。香は又非常に重大な役割を持つ。くさやの香で夫婦喧嘩が始まるといふ。好きな人にとっては香は魅力であるが、嫌な人は嗅いだ文で嫌になる。独りぼっこの食事は不味い。食物とにらめっこでは決してうまくない。鉄板に花を咲かせつゝ、食ふと思はず食が進む所から察すると人間も味の要素となつてゐるに相違ない。嚙みしめる味は又格別である。恐らく顎骨の受ける或感覚が味覚神経を刺激するのだらう。其証拠には義齒の人は嚙みしめぬば味の出ないものほど味がなくさうだ。するめなどは其尤なるものに違いない。

斯く觀じれば、一口に味とはいふもの、なかなか複雑な味から成立つてゐることに気がつく。

（浩一 郎）

味

何のこともで廣く細い孫さん味のことについてもなか／＼細い。こないだ近ちやんの処で落合つた時の話の様子を廣く御披露しよう。番茶は煎つて賣つてゐるものなどは問題ならん。鍋で香しい香をたて、焼いたのも駄目だ、どうして四五日分をホーロクで煎つて飲まねばならぬ。魚は尾斯で焼いたり、火でヂーと音をたて、焼いたのはいけない、反射熱で焼いたのでなければいけないさうだ。ゆで卵は煮たつた湯に三分間をよしとす。酒は白鷹、ビールはキリン、ウイスキーはブラツク・アンド・ホワイトださうだ。彼氏の言をそのまゝ、かりるならば「僕の話は口だけなんじやない實際にやらせたら凄まじいものだ」併僕は不幸にして何かの集りの時紅茶をさへ彼自ら入れてもらつたことがないのは残念だ。それで製さんも心得たもので御主人御歸りと云ふと早速今日は少し御飯はこげました。魚は鹽が過ぎたと先手をお打ちになるさうで頭のよさ加減に於て孫さん以上だ。併し御飯は三分煮過ぎたとか鹽が二分の一分多過ぎたとまではおつしやらないかしら。

(三角)

幕末にあつた事ども

知つてゐる人も勿論あると思ふが最近読んだ幕末外交史其の他の中で一寸面白く感じた事どもを幾つか抜書して御覧に入れる、笑つて下さればめづりものなり。

× × × × ×

「オマヘ」は「御前」なりといふ事

幕府の外国奉行が英國公使パークスと會見する時、公使に対して「オマヘ」云ふを通知官アレモオンダーシーボルトへ此の人は幕末時代には非常に重要な役割を日本に対してしてゐるが奉行に向ひ、公使は國帝を代表するものなるに、之を呼ぶに「オマヘ」を以てするは敬禮を欠くといふ。奉行いふ様「オマヘは御前なりゴゼンとは貴人に対する敬語である」と。シーボルト云ふ様、然らば以後はゴゼンと申されたし、奉行答ふる所を知らず。

・スパイ列席の事

團老等が外人に面談の節は大小目付々に立會ひ、外國奉行其の他諸奉行の時ば御目付、其の以下には徒目付御小人目付の立會ひを要する事となり居りしに、此の目付の事を「スパイ」と訳せし為、外國公使は大いに之を忌み、苟も兩國交

際の談判に「スパイ」の列席を許す事やあると大いに之を難じた。

・大統領とは

亞米利加合衆國は億万人の選にて聖賢たるべき人を入札にして彼の國王となす、大統領は總督にて四年目毎に國中の入札にて定むる。

・新見豊前守一行が米國へ使節となつて行つた時、

その船中に何千足といふ草鞋を持つて行つた事が書いてある。向ふでそれを履いかどうかは保証の限り非ず。

・往路ハワイに寄港した時國王に謁見した、その

時の王及び王妃の風姿を見て一行の一人が「御亭主はたすきがけなり、奥さんは大はだかぶさで珍客に逢ふし」。

・夜會に招待された。然し「夜陰は出行せざる因

風なれば」とて断り、又「御條約外の國と云ひ、殊に合衆國へ使節の大任済ぶる内は、遊興などには出ぬ」とやつてのけた。

・宴席に出できて一服と思つた所で「煙草盆」が

ない。灰吹もないのちストーブの火でつける。マッチもあつたのらうがせんなどは知らない。灰吹がないから吹がりを紙に包んで袂に入れてしまひ、

・宴會を江戸の市店などに、奮入足など酒盛りする様なものとし、

議會を傍聴して魚河岸の如しと

評した。いづれも傑作である。

砲台を見學して、接するにおのれは砲台の事は深く知らねば得失の論は云はず、ふれど、目當もなき、海面へ向ふ、川口は遠か離れたれば實用には如何あらん。

大統領を見て

大統領は七十有余の老翁、白髪穂和にして威儀もあり、されど商人も同じく黒ラシマの筒袖、股引何の飾りもなく、太刀もなし。

× × × × × ×

右の通りの按配、又は面白いといふ人が出て来たら、いゝ氣になつていくくらでも書く積り。

(熊)

莊太郎のやつた事

バツタが出来て又歸へる見送りの時、タクシーを降りる時こまかいのがないからとて謙坊に券拾銭拂はせた、それはいいのだが入場券は俺が買つてやるよと云ひ乍ら悠々と自動販賣機へ向つて打つた、鼻と腹を突き出し大手を振つた御なじみの格向で、つオヤ、奴こまかい十銭を持つて居ない奴だがしと皮に思つたら曾田は曾田らしく五十銭入れたら五枚出て来ると考へて居たんだとか。それに五枚銀貨が這入ると思つてゐるんだから御天氣が不順な奴だ。

(熊)

コンパで汽車に乗る法

誠文堂十銭文庫中、松川二郎著はす所の「合法的汽車電車乗法」にも載つて居ない超合法的乗法を公開しやう。但し之は二人以上が「ぐる」にならないければ目的を達する事が出来ない。

Aが八月一日に大阪を出る持つてゐるのは東京行の切符だ。新橋で途中下車をやる、途中下車の判を押さなければ占めたもの、此処から直ちに鉄道便で大阪のBへ送る、Bは又直ちに入場券で這入り東京駅で堂々と降りる、之ならどんなにして尻尾を掴まへられる心配はない。但し途中で檢札されてしまったものは駄目である。

(熊)

山の思出

自介は、あの時(???)があのはてしない氷の斜面を、さながら巨人の如く突き進んで行つた姿を今だに、あり／＼と思ひ浮べる事が出来る。そして斜面から陽の光がすっかり消へはて、夜がしのびよつて来た時の、あの空恐ろしい寒さを今だに感ずる事が出来る。

ほんの少しばかり平になつた岩かげに、皆がかたまり合つて居た時、寒さしのぎに唱つた彼の歌は今だに自介の耳へは聞へて来る。そして、如何に努力しても、ともしれば眠り勝ちの自介をしつかりと抱いて居てくれた *Blingsky* の力強い腕に

Chamomile からいさなり八千呎もせり立つた
 あの絶壁の上でさへ、全く信頼しきつて居た自分
 を今でも思出す。これ等の思出こそ、^{ホッ}眞実の喜び
 と云ふものであらうか。何年后になつても、あの
 困難な時に、むしろ喜んでこれを迎へ、真向から
 嵐や氷にぶつかつて打つた、あの頼もしき友を思
 出す事の出来るのは、自分の一生の歡びであり、
 この世の中を全て馬鹿らしく感ずる吾が心を知げ
 てさへくれる。

冬の火影のチラ／＼する中に、自分はあの
 Alsbury の打振ふ氷斧を見出す。それは頂度、
 あの次の日、彼が先にたつて、はるか下の方にあ
 たつて、燦々たる陽の光に *Coastal* が静かな
 大気をふるはし、小川が磊の向を躍り流れて居た
 牧場目科けて下つた時の事であつた。そして私共
 は自分等を歡び迎へて下れる友を思ふ心に胸を躍
 りせて、さらにそこから下へと下つて行つたのだ
 った。
*(My Climbs in the Alps and in Can-
 cadu.)*
(Mummery)

父、死去の際御香料賜はり、又色々御同情下さ
 いましたこと、誌上で厚く御禮申上げます。
 何かと思つて少しは書いても見ましたが、混乱
 した感情の底から勘み上げたものは唯誌面を汚す

に過ぎないと思ひまして止めました。唯皆様にお
 願ひし度いことは、親御さんのある方は、親御さ
 んを御大切に、兄弟のある方は兄弟仲よく、夫婦
 相和し、朋友相信じて下さるのが一番と思ひます。

消 息

赤城鈴太郎 大坂市東成区鶴橋南町一の五七六

五溪沼方

小栗 吉雄 名古屋市中区幸楽町二の五、市区

改正の結果前記の如く改まる。

矢作 太郎 東京市本郷区駒込林町八二

中川 孫一 七兵衛第二世御誕生の処き詳細は

後報。

浦松佐美太郎 八月上旬観光局の用事にて上高

地入りす。

吉澤 一郎 太平生命保険株式会社東京支店詰

となる。芝区櫻田本郷町九(銀座一

。八四)

渡辺 九郎 七月下旬上京、

金田 一郎 朝日海上火災保険株式会社内勤に

決定す。(東京丸の内二の十八、時

事新報社内)

村尾 金二 七月十七日御父君を没くされ、如何

ばかりか御愁傷の事ならんと深く御

察し申上げます。誌上を以て謹んで御弔詞申述べます。

集會

七月針葉樹例會

八月針葉樹例會 八月七日

渡辺九郎氏上京歓迎會 七月三十一日

一橋山岳部員小橋謙三君遭難救援隊遭難報告、

七月十八日小黒部に於て一橋山岳部員小橋謙

三君遭難す、一橋山岳部より増山、太田の両君

救援應援に二十日出発、針葉樹会員よりこと、

有りしが其後の経過良好なるため見合す、七月

二十三日如水会館に於て増山、太田の両君の救

援隊の報告でき、一橋山岳部始めての大きな

遭難なるため將來のためと考へて浦松、中川、

辻藤、磯野、高橋、手塚等集りて相談せり、其

後小橋君の経過良好大阪の病院に入院せるため

渡辺九郎氏に見舞方をお頼みし、会員一同より

心ばかりの御見舞の品をお贈りする。

附記

會計幹事の希望として本年度分会費未納者は成る可く早くおさめられたいとのことである。